第134回　日文研フォーラム

■

日本語の「カゲ（光・蔭）」外

—日本文化のルーツを探る—

KAGE (Light・Shade) in Japanese

—Searching for the Roots of Japanese Culture—

■

辛　容　泰

SHIN yong-tae

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　山折　哲雄

● テーマ ●

日本語の「カゲ（光・蔭）」外

—日本文化のルーツを探る—

KAGE (Light・Shade) in Japanese
—Searching for the Roots of Japanese Culture—

● 発表者 ●

辛　容　泰
SHIN yong-tae
東国大学校日本学研究所　研究員
Professor of the Dongguk Japanology Institute
国際日本文化研究センター　客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

2000年11月14日（火）

発表者紹介

辛　容　泰
SHIN Yong-tae
東国大学校日本学研究所研究員
Professor of the Dongguk Japanology Institute
国際日本文化研究センター客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

職歴

1958.3～1967.5　密陽初等学校教師
1967.5～1975.2　韓国教總会研究員
1975.3～1979.2　釜山女子大学日本語教育科専任講師
1979.3～1982.2　国際大学日語日文学科助教授
1982.3～現在　東国大学校日語日文学科教授
1990.12～1991.12　国際日本文化研究センター来訪研究員
1994.8～1997.8　東国大学校日本学研究所長

著書

1．原始韓・日語の研究	単著	1988	東国大学出版部
2．おもしろい語源ばなし(1)(2)	単著	1994	博而精出版社
3．おもしろい漢字ばなし	単著	2001	雲周社

論文

古代韓・日語のkom（熊）nim（任）について	単著	1988	「言語学」9号
甲骨文字と古代韓・日語	単著	1991	李栄九博士回記論
日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—	単著	1992	第37回日文研フォーラム
「日本書記」記載語彙考	単著	1993	「日語日文学研究」22輯
韓・日・漢言語の造語法について	単著	1993	「日本学報」30輯
上古漢語・原始韓日語の言語体系の類似性について	単著	1995	「日本学報」
上代日本語形成に関する研究(1)	単著	1995	「日語日文学研究」26輯
上代日本語の母音音素について	単著	1997	「日本学報」39輯
古代日本語・韓国語の音韻及び語彙の比較研究	単著	1997	久留米大学博士論文
十五（六）世紀韓国漢字音と日本漢字音の比較研究	単著	1999	「日本文化学報」

はじめに

筆者は東アジア大陸の主に漢文化圏の領域で、各々の独特の文化を築き上げた中国、韓国、日本に跨る三国の古代の文字・言語、及び文化等を研鑽してきたところ、日本語の「Ka-nge.カゲ（光・影・陰）」という言葉が表している意味が、一般的常識とは矛盾した表し方をしているのに気づき、これを解明するために長い時間を費やした。

それで、拙著（一九八八）『原始韓・日語の研究』東国大出版部、一〇六頁に、それについて若干の考察を納めたのであるが、本論ではもう少し詳しい考察をしてみたい。

光と陰は、全く正反対の自然現象である。このような矛盾的な表し方は、おそらく、他の日本語にはないと思われる。

上代日本語を始め、歴代の日本語関係文献を探しても、全く見当たらない。如何なることか。

これは、日本の国語学を研究している学者の誰もが関心を寄せる問題であるが、これを究明している学者は、なかなか見当たらなかった。

ところで、最近、吉田比呂子（一九九七）「カゲの語史的研究」が、筆者の目を光らせた。「カゲ」に関する語史的文献を繙いた労作である。

その他、木村紀子氏の「古代日本語の光の感覚―語根kagをめぐる意味の構造―」も最近、拝見した。

筆者は、拙著の『原始韓・日語の研究』にある論文のところどころで言及したことであるが、今までの日本の諸学者が、西洋の学問研究の方法論をいち早く導入し、東洋の諸文化を先行的に研鑽した功績は、高く評価すべき業績であろうが、しかしながら、今まで研鑽された諸分野において、それを省み、今後再考しなければいけないところが、あちこち目に入る。

中でも特に、語源解釈の分野は日本語だけでなく、諸外国の分野に至るまで、もう一度見直さなければいけないところがあまりにも多い。日本語の辞典に納めてある、単語の末尾の諸学者の語源解釈を始め、韓国語との比較における諸論文の内容等、このまま文献として残すことは、後学に多大な悪影響を与えると思う。

詳細はここでは省くが、一つの例を挙げると、村山七郎（一九八六）『風土と文化』「朝鮮語と日本語」小学館、四八七―四九二頁での朝鮮語のアクセントを表してあるところで、〈（　）内は、筆者の修正した内容で、村山氏の論考は便宜上省く〉、梨（最も高い―これは、梨、舟、倍の中で）、霜（中高下の三段階のアクセント）、客（最も高い）、手（中）孫（下）、種類（高下）、枝（中中）、小麦（中）、負う（高―ta）、父親（下高

下）、幼い（高下）、蜘蛛（高下）、花（高）、串（中）、国（高下）、丘（高下）、鶴（下高下）等、その他、いろいろ問題点があるが、省略する。従って、このようなアクセントの研究は、少なくとも、朝鮮半島の東南に位置している慶尚道のアクセントを現地で調査することが最も大事な事であろうと思う。それは、この方言は遠い昔の新羅の地域であり、朝鮮半島での唯一のアクセントがある方言であるので、朝鮮語を研究するのに大事な言語である。ただ、半島の北東部に位置している、ham-kjeong-doの方言にもアクセントがあるが、この方言を材料にして考察するには、いろいろ問題があるので、扱わない方がよかろうと思う。

その他、日本語の諸辞典にある語源解釈は、全面的に直すべきであり、早急に改善しないと後学に多大な悪影響を与えると思う。

本論

1．「kang-e〈カゲ（光・蔭）〉」について

1—1．吉田比呂子氏の著作を拝見した。著作名の如く「カゲの語史的研究」で、「カゲが表す光・陰」の矛盾を解明する内容ではない。

一方、木村紀子氏の考察も、その矛盾についての解明は見当たらず、ほぼ同様である。

1―2．筆者の考察では、「カゲ」の基本的語義は「限界」であり、その語根は「kjang-」のように思われる。

日本語のこの「カゲ（光・陰）」は、非常に古い時代に、日本に渡来した（創られた）ことばと言えよう。卑見では、弥生時代か、遥かそれ以前に、日本列島に渡ってきた渡来人が身につけてきたことばであると思われる。

勿論、こればかりでなく、筆者の考察によれば、日本語の中には、このような大陸から争乱を避けて逃げ込んできた人たちによって、日本列島に渡ってきたことばが数多くあるようである。その中の一つが、この「kang-eカゲ」である。

とは言え、これらが漢語かとはそう簡単には言えない。それは、漢族は黄河中上流に位置して羊を遊牧し、今から三五〇〇年前頃、商を滅亡させ周王朝を開いた民族であるから、中国大陸の一方言と言えよう。ということで、大陸からの渡来語をまるっきり漢語とは言えないであろう。それで、筆者のこのような考察においては、漢語とは言わず、〝大陸の言語〟と言う。

カゲの基本語義は「限界」である。その限界を表す語を挙げると、次の如くである。

「kjang-境鏡景彊競」等。その他「tjang-章」がある。

境は「土」を、鏡は「金」をつけて、各々「境界」「かが―み鏡」を表す。境は土地のサカイを表し、鏡は陽と陰のサカイに存在して、光を受けて蔭の方に影（姿）を映す役割を果たす器物を表して、土へん、金へんを除いた字がサカイを表す字である。

次の「景」は、「京」と同じく、「大きい」と言う意味と、また、「日かげ」の意味を表す字である。「日かげ」を表す場合は、境と同じく「けじめ」、つまり、明暗の境界を生じることを表す。

「彊」は「田の間にくっきりと境界をつけること」を表し、「競」は「勝」と「負」のサカイを表す字である。ついでに、「章」も文と文のサカイを表す字で、第1章、第2章と文章の境界を表している。境の字の土を除いた字とは、下辺にある人と十の差である。

1―3．日本の上代の文献に表れているカゲの意味を大略に示すと、「①光（影）火・②姿（影）・③蔭・④限界」である。

「渡る日も　影に隠らひ　照る月の　光も見えず……。」ここでは、影が「太陽の光」を表している。太陽の光を表しているところは、万葉集を始め、古事記、霊異記等にも見える。勿論、月の光を表すにも、「淀める　淀に　月の影見ゆ」、「移ろふ　月の影を　惜しみ」等の如く使われているのが見られる。

次は、姿を表している。「蝦鳴く　甘奈備川に　影見えて　今か咲くらむ　山吹の花」の如く、影は、姿を表している。

次は、暗い部分、つまり蔭（陰）である。「郭公鳥　此よ鳴き渡れ　灯火を　月夜になそへ　その可気も見む」の如く、蔭を表している。

最後の「kagiru,-ri」は、「光」と「限界」の両方を表しているのがわかる。

「玉　可支流　はろかに　見えて」これは、光を表している。

「きへゆく年の　可支里　知らずて」ここでは限界を表している。

以上であるが、如何にしてこのように、光と光に遮られた暗い部分という、相反する意味が同じ語形に共存されているのか。

前述の如く、この「カゲ景・境・鏡・彊」の意味は、「境界」を表す語であり、中でも、「景」は、「光」の意味をも表すことによって、その境界に立ち、光と蔭の両方を行き来したように思われる。それを裏付けるのが、「景」と同じ意味を表す「鏡」である。鏡は、光と蔭の境界に立って、光を受けて，それを蔭に送る器物である。「kanga-mi」は、かが（光）み（見）であるから、ここの「かが」は、光を表す。つまり、「さかい」を表す語が「ひかり」を表す語に変わっている。

影の「さんづくり（彡）」は、姿を表す字である。従って、光、姿に行き来したので

あろう。

この語根、「kang-」による単語をひとつだけ拾ってみると、かが―やく、かぎ―り、かぐ―やひめ、かげ等、様々である。しかし、大抵において、光（火・炎）を表す語が大部分であろう。中でも蔭は稀で、後世に至っては、光よりもむしろ、蔭の方に傾いたようである。そして現代では姿を表す語として、「面影」以外は、見えない。

ここで、卑見として述べたいことは、かつて、斯界の論争の資料である、「鼻音ガ-nga」と「ガ-ga」の、サキ、アトである。

筆者は、これについての詳しい論考はないが、前者の方が先であろうと思う。

日本語の「がぎぐげご」は、「んが、んぎ、んぐ、んげ、んご」が、その基であったが、後世に至って、語頭の「n」が脱落したのではないかと思う。

原始日本語で、語頭の濁音の有無についての論争は、未だ決着がついていないが、ガ行は、漢字音の鼻濁音、例えば、「nga雅、ngi義、ngu愚、nge解、ngo呉」のような伝来音によって生まれた音節であろうと、筆者は信じる。今後の研究に期待したいと思う。

2. 「kur-u回」について

日本語の中には、前述の「カゲ」の如く、大陸の昔のことばが渡来人と共に渡ってき

て、そのまま使っていることばが、かなりあると思う。中でも、擬音、擬態語は数多く、大陸の言語が含まれていると思われる。

この「kur-u回」もそれである。回の上古音は、諸学者の再構成音が、「gwər」になっている。この音韻の二音節化が日本語の回転を意味する‘kur-u（gur-u），であることは間違いないであろう。擬態語の「くるくる」、「ぐるぐる」が回転を表していて、それを確実に裏付けている。その他、「手繰る」「巡る」等。

韓国語にも、日本語と同様に回転を表す動詞として、‘kur-ë-ta，がある。-ë-は、接尾接続母音、-taは、動詞、形容詞の接尾辞である。

筆者が、ここで一言述べたいことは、韓国語と日本語が類似しているからと言って、それが皆、朝鮮半島を経由して日本列島に渡来したという言い方は、再考すべきだと思う。それは、大陸から朝鮮半島に、日本列島に各々直接渡って来る場合が、いくらでもあり得るからである。

昔の舟は筏が主で、これは早ければ二日ぐらいで、立派な舟が作られる。しかも、筏は大波にも沈没することがなく、いちばん安全な舟である。このような事情を考えると、大陸からの渡来人の多くは、遠い昔から、筏で日本列島に渡ってきたに違いないと思う。

「kur-u」に関する日本語の単語群は、割合多く見られる。先ず、「kur-u暮る」で、

昔の人は、太陽が回転すると思ってこのように表し、「kur-i繰り」も回転を表す。「kur-e暮れ」は、その名詞形である。

ここで、日本語の「kur-a-si暗し」「kur-o黒」を考えて見たい。色彩語は、通常他のことばから派生して作られたという。例えば、赤は明りから、青は滄海のいろから、黄色は黄色い炎のいろから作られた色彩語であろう。

太陽が沈むと、世の中はまっくろになる。それで、日が暮れると言う言葉の派生的名称の「くら・くろ」等が作られたのであろうと思う。

また、「kur-u来る」ということばについて考えてみよう。「来る」ということばは、「行ったものが帰る」ことを表すのに作られたと思う。とすると、これは大陸の言語の「帰kjwər」から由来した言葉であろうと思う。すると、「帰る・来る」ことは、回転を表す単語群に入ることばであろう。「来る」の終止形は、「ku」でなく、「ki」という一説も参考になるかも知れない。

3. 「fot-o女陰」について

日本語の女陰の名称には、「mang-(g)u（man-gu）萬久」と「fot-o女陰」二つがある。前者は、古事記に、イザナギとイザナミの両神が御柱を回りながら交接し、島々を次々

と産む場面で、

「mi御-to斗（男根）-no所有格-mangu萬久（女陰）-fafi波比（交接）」

という記事があるが、この「mangu」が今日までも伝われている女陰の名称で、「fot-o女陰」は、現在では、死語になったようである。

この「mang-u」は、「円形」を表す語で、日本語では「mang-a-ruまが―る（曲る）」に残っているようである。

日本語の女陰の名称を「mang-gu萬久」と表したのは、その模様が円形であることで、「mang-garu曲る」と同根である。

韓国語では、「mang-tae円形」「mong-u-ri円形打撲傷」「mung-ke-kurjm円形の雲（入道雲）」の如く、母音を交替しながら、あちこちに見える。「fot-o」は、韓国語の女陰の名称の「pot>pot-i>pots-i」に、ちょうど対応している。

古代のことばづくりの基本的方法は、「かたち」である、つまり、象形を基本にしてどんどん派生語が生まれるのである。

では、女陰の象形を見よう。両方に「ひらく」形であろう。「ひらく」を表す象形文

字を見よう。

「癶pwət」は、「止（あし）＋止（あし）」つまり、両足を開いた象形文字である。従って、事物の「ひらく」を基本義とした文字である。「發」は、後世に作られた字であるが、その意味をよく表している。

大陸のこの人体の器官を表す象形文字と、韓国語、日本語がぴったりと合っていることは、注目に値する。

次に、「to男根」を見よう。この日本語に当たる韓国語は、「tjot＞tsjot」である。比べてみると、日本語では古代語に、よく表れている、韻尾の切尾化がここにも見える。それと、拗音的要素も消滅させて、「to」と表しているのである。

大陸の突出を表す字を見よう。

凸twət・突dwət・出tjwət

等である。皆「突き出る」ことを表している。「凸」は形そのもの、「突」も犬が穴から突き出るを表し、「出」も足先を前に突き出すことを表す字である。

ここでも、大陸の言語と朝鮮半島語、日本列島語がぴったり合っているのが見られるであろう。それで、男根は人体の中で最も「突き出す」器官なので、このような名称が与えられたのであろう。

韓国語で、足を「pal」という。これは、前述の両足を開いた模様を表す象形文字、「ᄇᆞpwət」と関係があることばで、先ず韓国語の特徴のひとつとして、音節の語尾（韻尾）の、-t、は、遠い昔に作られて固定化された。例えば、韓国語の女陰の名称である「pot>poti>potsi」等々、いくつか以外は、固有語においても、伝来した漢字音においても「-t>流音化-r（-l）」されているのが見られる。

それと、「-w-」が省略されているのも、その頭音pが、―両唇音ということで説明ができる。結局「ᄇᆞpwət>pal」に変化したことがわかる。

この現象が、韓国語だけでなく日本語にも数多く表れているのが見られる。

韓国語の「原pəl」は、日本語の「原far-a・墾far-i」等と同源であることは周知の通りである。これは「ひらく開」を表す「ᄇᆞpwət」に遡ることができる。

日本語の「fVrV（V＝母音）」形のことばの大部分は、これと関連があることばであろう。

日本語の擬態語で、氷とかガラスの割れる模様を、「バリッ！」というが、これも前述のことば等と関連して考えてみよう。また、あちこちに分かれる模様を表す「パラパラ（バラバラ）」も考えてみよう。母音交替は、どの言語でもあり得る現象であるから、「fVrV」形の単語を集めてみよう。

ついでに、大陸の言語、「tswən寸」は、「手」を表す字である。韓国語で、手を「son」という。破擦音「ts」と摩擦音「s」は、古代日本語の「サ行」に混在されているという学説が固定化しつつあるが、韓国語の、手の名称は、身体語であることで、相当に古い言語と思う。それはともかく、この両語は、その根が同根であることは疑いないであろう。

4. 「af-u合・逢・会」について

日本語のこの「af-u合・会・逢」ということばは、二つ以上の事物が接近することを表すことばである。また、日本語の「of-u負う」もそういう意味で、前の「逢う」等と関連されよう。この「負う」は、韓国語の「əp-ta負う」と、早くから比較されていることばである。

三国史記巻三十四、新羅の地名で、比屋県、本阿火屋県（一云併屋）……、とあって、比＝阿火＝併の対応が見られる。ここで、比は二人の人が或る方向に向けて並んでいる模様を表す字、併は二つの事物が合併することを表す字、それと、阿a　火xwərは、固有語を表していて、併合の意味を表す韓国語、「apəl」を連想させる。

火の上古音の声母、x-は、この韓国語を参考にして遡る場合、その源は、p-と言えよ

う。つまり、p>f>h（x）という過程で遡られる。

韓国語で、子を負うことを「ə p-（ta接尾辞）」という。それと、〝併せて〟と言う意味を表すことばに、「a-u-rə-ta」があり、これを慶尚道方言では、「ə pul-ta」と言われている。

これによって、日本語の「af-u合う・逢う・of-u負う」は、この韓国語と同源であることがわかるであろう。

大陸の言語で、「ɣə p合」がある。このことばの声母（頭子音）は、喉頭有声摩擦音で、韓国語と日本語にはない音で、例えて言うと、水を口の中に含んで、うがいをするときの音と似ている。大陸の昔の音韻は、たいへん複雑な音があって、漢字音が韓国、及び日本に伝わるときは切り捨てて、自国の音韻に合わせて使う。従って、この頭子音は、切り捨てているのが見える。それで、韓国語では、「ə p負う」と言い、日本語では、「af-uあふ（合ふ・逢ふ・会ふ）」と言うのである。

5.「fug-u河豚魚・fuk-u-ru肥・fuk-u-ro袋」について

ふぐ（河豚）を韓国語で、「pok」と言う。母音が違うだけなのと、-g-は、二音節化になることによって母音間の-k-が有声音化されたのであろう。

それはともかく、この単語群は「ふくらむ」を表しているが、韓国語にも、これらに対応することばがある。先ず、畑の盛り上がっているところを「puk」と言い、太鼓を「puk」と言い、機織りの緯糸を入れる、膨らんでいる箱を「puk」と言う。ふくべを「pak」と言い、車輪を「pakui」という。

日本語の男性のふくらんだ性器を「fug-u-ri」というが、ここの-g-も、もとは、-k-で、有声音間という環境によって、変化された音であろう。また、「fuk-u-ro袋」「fuk-ufuk-u—si肺」がある。肺をこのように呼んだのは、空気を吸い込むと、それが膨らむということで呼んだのであろう。

大陸の言語で、「pujəg子房」「pujəg胚」「puəg培」「puəg缶」「puəg富」「puək福」「pluək禄」等がある。

子房は花柱のしたに接して肥大した部分、胚は種の中にある膨らんだ部分、培はつちかうことで、土を盛り上げて植物を養うを言い、缶は膨らんだ模様、富は豊富そのものを表す字で、同じく膨らみを表し、福も富と同様。最後に、禄であるが、これも福と同様。それと、頭子音に、plという子音（声母）が二つある現象であるが、大陸の上古音では、pl、kl、sl、のように頭子音が二つあるのが見られる。例えば、風の頭子音の現代の音は、p-で、しかし、嵐は、l-である。また、各、格、閣等は、k-であるが、洛、絡、

路、賂等は、l-である。数は、s-であるが、婁、楼等は、l-である。

ここでの大陸のことばで、その韻尾は、大体-gで、これが、朝鮮半島系、日本列島系の言語では、韻尾（語尾）の、-kか、二音節化した音節の頭子音、-kか、-gになっている。

韓国語で、腹が膨らむとか、ポケットがふくらむことを「pul-luk」と言う。これには、禄の音韻と酷似しているのが見られる。

大陸の言語、朝鮮半島の言語、日本列島の言語が、数千年間あまり変わっていないことが、はっきりと伺うことができる。

おわりに

筆者は、今回、日文研の諸研究会に参加して、先ず、学問の視野を広げたことは、今後の筆者の勉強に多大な影響を与えたことと、今後の東アジアの研究は、少なくとも、中国大陸と朝鮮半島、日本列島の諸文物を含めた考察をすべきであると信じ、その一端を、この「日文研フォーラム」に述べてみた。そして、今後の日本語及び他言語との比較研究は、是非とも、各々の言語の単語群を先ず集めて後、比較すべきことを本考察は

強調しようとしている。

それと、ここ一〇〇年近くの日本語と他言語との比較を行ってきたが、なかなか、その源が見つからない。よって、日本列島系と朝鮮半島系の言語は迷子になっている。その原因は何か。いろいろあると思うが、卑見では、この両言語は、先ずはその歴史が、たいへん古いということと、この半島と日本列島に渡来する前に、大陸の様々な部族語との接触、混交によって出来上がった言語であることに、主な原因があるのではないかと思う。印欧諸語では、数詞、身体語をはじめ、人間を表すことばを比較してみると、すぐその親近関係を伺うことができる。

黄河下流地帯は、何十万年もの長いあいだ様々な部族が一進一退を繰り返して、民族、言語共に混交し、三五〇〇年前、やっと国の形として〝大邑商〟が建国されたが、その後も何千年という長い間の争いによって、民族も言語も融合されてしまったというのが、主な原因であると思う。

ということで、日本語、韓国語は、アルタイ諸語とも、漢語とも、パプア・ニューギニア語とも、南方諸島語とも、チベット語とも、タミール語とも、同源の単語が表れ、この現象をいち早く学界に報告し、日本語は、何々語と同系だの、ああだの、こうだのと論争を続けている。日本語の系統論が様々な理由は、大陸での何万年もの長い間、

様々な部族語との混交と、それらの部族等がこの東アジア地域及び、南洋諸島等に移住していることによって、アジア諸国のどこの言語と比較しても、同系統のことばではないかと勘違いする同根の単語が出てくるのである。

これからの研究は、是非とも、各々の言語の単語群を先ず完璧に集めよう。その後の段階で比較してみよう。系統論の結論は、出さなくても自ずから出るはずである。今までの研究は、系統論に集中し、個々の言語の徹底的な考察ができていないうちに、すばやく系統論を提起したのが望ましくなかったと思う。

このような共同研究会を是非とも行って、斯界の学界は、迷子になっている日本語、韓国語の源を探すべき大事業を果たさなければならない状況に、今、攻められているのである。

二〇〇一年　四月一〇日　日文研　蘭茶研究室にて。

発表を終えて

2000年７月初旬、爽やかな初夏の香りが漂っている日文研に来て以来、１年中、殆どというほど、私の研究室の鍵の出入帳は、‘シン’という字で埋められた。

朝７時半出勤、夜８時頃退勤。何でこんなに忙しかったのか、忙しかったと言うよりも楽しかったという方が、正答といえよう。

各種の共同研究会にもなるべく参加したい、小学校の授業もしてみたい、木曜セミナーで、私のおもしろい漢字の成り立ちについて、皆さんとお話を交わしてみたい、毎月行われる所長特別研究会にも参加して、世界の諸文化を勉強してみたい等々。

日文研の、この１年間の生活において、何よりも、影響されたことは、私の研究の視界の拡大である。古代中国、韓国、日本語の言語以外は、あまり関心を寄せなかった。しかし、言語とその他の文化との関わりを究めることは、何よりも大切であることを覚えたのである。

流・棄という字は、遙か昔の大陸で、初生児を川へ流し、草むらに棄てる習俗を表す字として創られた。‘流’の右旁の上の字と‘棄’の上の字は、子を逆さまにした、母体から生まれ出る‘子’の姿である。又、‘文’も、今は‘文字’を表す字であるが、元は人間が一生を終えて、あの世に去る時、文廟（祖廟）に祝祷を行う儀式の一つとして屍体の胸に刃物で文身の傷をつける習俗を表す字である。

これからの私の研究は、‘文字は、文化の始まり’という意識を基に、東アジア文字学と文化について勉強したいと思い、先ず、このような拙論を世に出してみた。

今後とも、先学諸氏の心からのご指導をお願い申し上げる次第である。

遅ればせながら、年中、お忙しいところ、お世話をして下さった千田稔先生を始め、研究協力課、海外研究交流室の皆さん方、日文研のスタッフの皆さん方に心からお礼申し上げる。

辛容泰

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engerbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A.トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウイーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋―都市社会の自由とその限界―」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性―猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに―」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Erinst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムート O. ローターモンド （フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮 （中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディア大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン （カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2. 7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉕	2. 9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗—中国と日本」
㉖	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト（リーハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ （カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikotaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント(フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

㉟	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」
㊳	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン （デリー大学教授・日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ(ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4. 9. 8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン （米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） William D. JOHNSTON 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスタ（甲南大学経営学部講師） Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐって—」
㊾	5. 1.12 (1993)	朴　正義 （圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット （米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授） Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水　義明（米国･プリンストン大学マーカンド栄誉教授） Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー（1854～1919）とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金　春美（高麗大学校教授・日文研来訪研究員） KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ（ハワイ大学教授） Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8 (1993)	姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） H. W. KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科挙制度をめぐって—」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ （ソフィア大学教授・日文研客員教授） Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金　容雲 （漢陽大学教授・日文研客員教授） KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン （コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー （スロベニア･リュブリアナ大学助教授･日文研客員助教授） Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ（ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン （ミシガン州立大学連合日本センター所長） J. Martin HOLMAN 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモア（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員） Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク （フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授） Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス（オハイオ州立大学助教授） Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880〜1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ （フィリピン大学アジア・センター準教授） Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉　建輝 （中国・南開大学副教授・日文研客員助教授） LIU Jian Hui 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン （オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授） Charles J. QUINN 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15 (1994)	賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20 (1994)	彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦⓪	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付—ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心に—」
⑦①	7. 2.14 (1995)	厳　紹璗 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのかかわり—」
⑦②	7. 3.14 (1995)	王　家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦③	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」

⑭	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25 (1995)	崔　吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7. 9.26 (1995)	蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17 (1995)	李　均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリューシナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

㊷	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」
㊹	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
㊺	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
㊻	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
㊾	8.10. 1 (1996)	王　秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」

90	8.11.26 (1996)	王　宝平（中国･杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授） WANG Bao Ping 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳　生保（中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授） CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ （ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員） Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭　永喆（韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授） KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル（スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長） Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授） Michele F. MARRA 「弱き思惟―解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家バークレー仏教研究所準教授） Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 ―なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） Jan　SYKORA 「近世商人の世界―三井高房『町人考見録』を中心に―」

98	9. 7. 8 (1997)	鶴田　欣也（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） Kinya TSURUTA 「向こう側の文学―近代からの再生―」
⑨⑨	9. 9. 9 (1997)	ポーリン・ケント（龍谷大学助教授） Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン （カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か―21世紀に向かって」
⑩①	9.11.11 (1997)	金　禹昌　KIM Uchang （韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ　Livia MONNET （カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク　Carl MOSK （カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ　Jan SYKORA （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 鶴田欣也　Kinya TSURUTA（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人―外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ（龍谷大学助教授） Jonah SALZ 「猿から尼まで―狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜　信杓 （韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑭	10. 2.10 (1998)	高　文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者―一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー (筑波大学教授) Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才―語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に―金井美恵子の小説における映画的身体」
⑧	10. 6. 9 (1998)	島崎　博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
⑨	10. 7.14 (1998)	丘　培培 (米国・バッサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか ―詩的イメージとしての典故―」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑭	11. 1.12 (1999)	杜　勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑯	11. 3.16 (1999)	エドウィン A. クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑰	11. 4.13 (1999)	ウィリアム J. タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

⑱	11. 5.11 (1999)	金　知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授) Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑳	11. 7.13 (1999)	リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
㉑	11. 9. 7 (1999)	宋　敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン・ノエル・ロベール (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) Jean-Noel A. ROBERT 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
㉓	11.11.16 (1999)	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授) Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
㉔	11.12.14 (1999)	楊　暁捷 (カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) X. Jie YANG 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ (日文研中核的研究機関研究員) Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8 (2000)	李　応寿 (韓国・世宗大学校副教授・日文研客員助教授) LEE Eung Soo 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14 (2000)	アンナ・マリア・トレーンハルト (ドイツ・デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) Anna Maria THRANHÄRDT 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11 (2000)	ペッカ・コルホネン (フィンランド・ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) Pekka KORHONEN 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9 (2000)	金　貞禮 (韓国・国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) KIM Jeong-Rye 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13 (2000)	ケネス・リチャード (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) Kenneth L. RICHARD 「出島—長崎—日本—世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン(1867—1944)と倉場富三郎(1871—1945)」
131	12. 7.11 (2000)	リュドミラ・ホロドヴィッチ (ブルガリア・ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) Lyudmila HOLODOVICH 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」

⑬②	12. 9.12 (2000)	マーク・メリ (国際日本文化研究センター外来研究員) Mark MELI 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10 (2000)	リチャード・ルビンジャー (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Richard RUBINGER 「読み書きできなかったのは誰か—明治の日本」
⑬④	12.11.14 (2000)	辛　容泰 (韓国・東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) SHIN Yong-tae 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12 (2000)	蔡　敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員教授) CAI Dun da 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」
136	13. 2. 6 (2000)	バルト・ガーンズ (国際日本文化研究センター中核的研究機関研究員) Bart GAENS 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6 (2001)	ポール・グローナー (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) Paul S. GRONER 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10 (2001)	李　卓 (南開大学教授・日文研客員教授) LI Zhuo 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」

139	13. 5. 8 (2001)	エッケハルト・マイ (ドイツ・フランクフルト大学教授・日文研客員教授) Ekkehard MAY 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12 (2001)	徐　蘇斌 (国際日本文化研究センター外国人研究員) XU Subin 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm

＊＊＊＊＊＊＊
発 行 日　2001年9月1日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp
＊＊＊＊＊＊＊
© 2001　国際日本文化研究センター

■ 日時

2000年11月14日（火）

午後２時～４時

■ 会場

国際交流基金　京都支部

第一三四回　日本語の「カゲ（光・蔭）」外　―日本文化のルーツを探る―

辛　容　泰

国際日本文化研究センター